HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ゲルハルト・ハウプトマンの『キリスト狂エマヌエル・クヴィント』について
Author(s)	石川, 克知
Citation	独語独文学科研究年報, 10, 33-48
Issue Date	1984-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25646
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_P33-48.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ゲルハルト・ハウプトマンの『キリスト狂エマヌエル・クヴィント』について

石　川　克　知

1

聖書はこれまで文学に多くの素材を提供してきたが、1910年に出版されたゲルハルト・ハウプトマンの処女長篇小説『キリスト狂エマヌエル・クヴィント』（以下『クヴィント』と略す）は、福音書そのものの書き換えといってよいストーリーをもっている。

1890年頃シュレージェン地方に浮浪者風の男があらわれて、広場で辻説法を始めた。「悔い改めよ、天国は近づきたり」（11）広場の聴衆からも、小説の語り手からも狂人扱いされるこの男エマヌエル・クヴィントは、大方の非難叱責、さらには迫害にもかかわらず、イエス・キリストの生涯とそっくりの道を歩み、十二弟子ならぬ八弟子を従えてブレスラウへ赴き、弟子の裏切りに会いあわや死刑にされそうになるが、無罪が証明されて密かにそこを立ち去る。その後ドイツ各地を転々とするが、誰にも受け入れられず、スイスの山中で道に迷い凍死するのである。

まさに現代シュレージェン版イエス伝といった内容をもつこの小説は、技法の上からいっても何ら難解な点もなく、一見ごくnaivな年代記風物語の体裁をとっている。このnaivな印象は主として事件を自明のこととして解説する語り手に起因しているのであるが、小説が進行するにつれて語り手の態度が曖昧になり、同時に小説全体が謎のような様相を呈してくる。結末も、「解決をつけないこと」をもって信条としたハウプトマンにふさわしく、「神の王国の秘密？」（414）という謎めいた言葉で終わっている。凍死したクヴィントのポケットから発見されたこの言葉は何を意味しているのであろうか。そもそも主人公エマヌエル・クヴィントとは狂人なのかイエス・キリストの再来なのか。聖書を異常なやり方で読み耽ったためにMessiaswahnにとりつかれたクヴィントの姿には、騎士道小説を読み過ぎて妄想にとりつかれ諸国遍歴の旅に出るドン・キホーテの姿が重なってくる。そういえば『クヴィント』にはどことなく『ドン・キホーテ』風のおもむきもなくはない。セルバンテスがフモールの精神で騎士道小説のパロディーをおこなったように、ハウプトマンも福音書のパロディーを意図したのだろうか。キリスト教は何といってもヨーロッパ文化の

根底をなすものであり、ハウプトマン自身もまた生涯を通じてキリスト教に深くかかわっていたことも良く知られている。それ故イエスの生涯の書き換えがどのような観点からなされたかを検討するならば、ハウプトマンのキリスト教に対する姿勢、ひいては彼の世界観があらわれてくるだろう。自然主義文学の旗手として華々しく文壇にデビューした後多様な変貌をとげ、賛否両論の渦巻くなかでいまだにその全体像がつかめていない謎の作家ゲルハルト・ハウプトマン、その神秘の世界を解く鍵が、『クヴィント』をめぐる謎の中に含まれているように思われるのである。

2

ハウプトマンがその長い創作期間のなかで手がけた作品の数は多く、その内容も多岐にわたっている。自然主義演劇、写実主義風の小説、抒情詩、韻文劇、ヘクサーメター叙事詩、自伝等の多様なスタイルで、ブルジョア家庭、プロレタリアート、宗教改革時代、架空の国、新大陸、ギリシャ神話といった様々な世界が描かれている。これらの作品を目にするとまるで博物館の前に立つような印象をすらうけるが、同時にいくぶん当惑の感も否めない。統一原理が把握できないからだ。そもそもハウプトマン程「レッテル」をうけつけない作家も少ないだろう。しかしこの多様さを、ブルジョア・センチメンタリズムの悪あがき[1]としてかたづけてしまうわけにはいかない。ハウプトマンの思想基盤はブルジョア・イデオロギーの枠内にはおさまらず、その作品もヨーロッパ文化の根本問題を含んでいるように思われるからだ。それ故まずはゲルハルト・ハウプトマンというÄolsharfe[2]が時代の風に接する点からみていくことにしよう。

周知のようにハウプトマンが活躍した時代はドイツ市民時代の末期であり、その統一的世界像が崩壊しつつあった時代だ。現実の関連の欠如、形式と内容の分裂の時代、ウィーンではヘルマン・ブロッホがこのホフマンスタールの時代を「価値真空」と名づけたことも有名である。伝統的な文学形式におさまらなくなった世界は新しい形式を求め、様々な文学潮流を生み出す。そのなかで人一倍伝統に愛着をもつトーマス・マンがあらゆる傾向の文学潮流からも孤高を守り、パロディーを用いて過去の伝統を自己の創作原理のなかに取り入れたことも良く知られている。その際マンの思想基盤となったものはHumanitätである。例えば過去の神話を心理学を用いて人間的なものにし、現代の価値真空に対する武器にするといった方法がマンの打開策であり、そこでは古い形式が新しい意味を担って再生している。

ハウプトマンもまた打開策を過去に求めた。両者には類似点も多いのだが、しかしその方法も結果もまったく別のものになった。ハウプトマンが思想基盤として見出したものは神秘主義である。彼がヤーコブ・ベーメ等の神秘思想と深く取り組んでいたことは良く知られている。ただ問題なのは、ハウプトマンの神秘主義が特定の傾向と結びつかないことである。ドイツには中世の尼僧神秘主義以来の確固とした神秘主義の伝統がある。その最盛期にマイスター・エックハルトにより極め

て思弁的かつ倫理的な性格を付与されたドイツ神秘主義は、その後自然宗教的な傾向を示しつつハウプトマンの故郷シュレージエンでベーメにより新たな展開をみせる。しかしハウプトマンの神秘主義がこのドイツ・キリスト教神秘主義のみに基づいているわけではないことは、彼の作品に色濃くあらわれる異教的要素が示している。彼はドイツ神秘主義から思弁的性格とキリスト教の要素を減ずることで、ここでも神秘主義の根源にまで遡っているように思われる。そもそも神秘主義は人類の文明とともに古く、その現象形態も極めて多様で、総括的な理論をひき出すことは不可能といえるのだが、その基底には必ずunio mysticaがある。あらゆる神秘主義はこのunio mysticaをそれぞれ独自の形態で発展させていったものといえよう。絶対者あるいは超自然の力との論理の彼岸における合一を意味するこのunio mysticaの本質は、畢竟自他の境界の超論理的解消による全的統一の達成である。従ってunio mysticaにおいてはあらゆる対立が克服される。さらに神秘主義は世界を神秘な力により統一された宇宙としてみる、いわば汎神論的傾向をもつ。『クヴィント』には諸々の神秘主義の思想の反映がみられるが、特に三位一体をめぐる解釈と汎神論的自然神秘主義の二点に関して、神秘主義の基本骨格をうけ入れていると思われる。『クヴィント』における神秘主義の扱い方については後に述べるが、今ここではハウプトマンに対するその意義について若干触れておこう。

ハウプトマンにおいて神秘主義は、例えばトーマス・マンにおけるHumanitätのような現実世界に対する思想上の力とはならなかった。むしろそれは彼のパースペクティブ、世界に対する見方に関与しているといえよう。すなわち世界のなかに有機的な関連をみようとする見方である。ハウプトマンの神秘主義の目は統一を求める目であり、それは作品の構造にもよく反映されていると思われるが、この点に関しても後でまた触れる。ただこのパースペクティブがどの位有効力をもつかという点に関しては、いまだ明確には答えられない。従ってハウプトマンの神秘主義が全作品を通じて妥当する規範というわけではないこともいうまでもない。

文学形式の面で基盤を見出すのはさらに困難である。作家は誰でも自分の文体をもっているものであり、どのような仮面のもとにあってもその特徴は隠れたままにはとどまらない。例えばトーマス・マンはほとんど常に他人の文章のパロディーをおこないながらも、自分の文体を忘れたことがない。これに反してハウプトマンは独自の個性的なスタイルをもっていないように思われる。彼には韻文を愛好する傾向があったそうで、晩年には韻文で書かれた作品が多い。しかしヤンブスやヘクサーメターあるいはダンテ流のテルツィーネで書かれた作品には、それらの古い形式を彼独自のスタイルに加工し現代にふさわしいものとなすような意図、あるいは痕跡はみあたらない。古い形式が古いままにとどまっているのだ。 演劇の上でパウル・ベックマン等に高く評価されたSprachmimik(3)も、言葉では表現できないニュアンスを示すための一種のパントマイムであり、言語本来の機能を示すものではない。散文小説にあっても特に独自のスタイルといった形式はみあ

たらず、１９世紀写実主義風のスタイルがそのままうけつがれているように思われる。ハウプトマンは方言描写において、すぐれた模倣能力をみせたが、事情は方言以外でも同じようだ。神秘主義者がその奥義を語るのに既存の宗教形態を利用したように、ハウトマンも自己の内的経験を表現するのにもっぱら過去の表現形式を利用したといえるであろう。

しかしこの一見混乱とも思える表現形式の多様さにもかかわらず、そこに描き出されたものには確固とした造形力、すぐれた現実感覚が感じられる。ハウプトマンの無駄のない適確な描写は、自然主義により培われた現実感覚に基づいているように思われる。決して思弁や空想の奴隷とはならず、あくまで現実の直接性を堅持しようとする厳格な形成意志、ここにハウプトマンの形式上の特徴があるといえよう。自然主義あるいは写実主義というのは周知のように極めて曖昧な言葉である。この言葉の定義にかかわる迷路に踏み込むことはしない。ここでは１９世紀に顕著になった「現実をありのままに描写する」という解釈に従っておこう。ただ問題となるのは自然主義あるいはリアリズムの手法で描かれた作品にあっても、作家によりその結果が大きく異なるという点である。リアリスティックに描かれたものも、それが作品全体の関連のなかに組み入れられ意味が付与された場合は、現実の直接性を離れて抽象物、純粋な形象へと昇華される。例えば自然主義作家エミール・ゾラの作品をみてみると、ここでは彼の厳しい生物学的要請にもかかわらず、描かれたものが現実のレベルを離れて象徴へと移行しているのがわかる。ナナもジェルヴェーズも生身の人間ではなく、ゾラによって緊密に張りめぐらされた抽象論理の糸にあやつられるあやつり人形にすぎない。『実験小説論』のなかで高らかに宣言された生物学的要請は、畢竟物語作家ゾラが自己の物語を展開するために利用した新しい関連方法なのだ。あるいはトーマス・マンをみてみよう。彼の文学技法がリアリズムに基づいていることは明白である。それは特に時として過剰とも思える細部描写にあらわれている。しかしこのリアリスティックな細部描写も小説全体のなかでは、あらゆる地上の拘束から解き離たれて、純粋な象徴へと昇華してしまい、日常の現実とはまったく次元を異にする新たな関連の世界を形成する。これに反してハウプトマンの作品では現実の直接性からの昇華過程が不充分で、妙に現実的な生々しさが感じられる。観念的ではなくて、生理的なのだ。ハウプトマンにあっては描かれたものが現実から遊離し観念の道具になるということはなく、従って『ハンネレの昇天』にみられる如く、夢は夢にとどまるのである。

3

価値真空たる社会の現状にハウプトマンは苦悩と悲惨しか見出さなかった。クヴィント信者達やその他の作品において描き出される労働者・貧民の惨状はいわずもがな、ブレスラウでクヴィントに救いを求める上流階級の人々の姿のなかにもこの世の地獄図が浮かび上がってくる。労働者にあっては搾取、家族にあっては心の絆の欠如、科学の進歩も政治理論も無効となる社会だ。ちなみにハ

ウプトマンはゾラとは対象的に、この悲惨の原因のひとつに科学技術の進歩を考えており、『クヴィント』のみならず『使徒』においてもその考えが強くあらわれている。この現状より生ずるペシミズムに、『クヴィント』ではドーミニクが直接的な表現を与えている。「吐き気がする、吐き気がする、この世界に吐き気がする」（374）このペシミズムはハウプトマンのほぼ全作品を支配しており、特に末世的世界表象となって作品の背景を形づくっている。『アウリスのイフィゲーニエ』をラシーヌやエウリピデスのそれと比較すると、その末世的雰囲気が特に目につくのである。

救いようのない惨状を呈する現代の真空状態に対して前向きの解決策を提示することのできないハウプトマンは、過去のヴィジョンあるいは根源形式なるものをもってきて意味の補充をはかる。『クヴィント』においては谷の信者達の姿は、中世あるいは宗教改革時代のイメージと重なり合う。彼らが示すのはヨアキム風千年王国を求める民衆の姿であり、中世末期の死の舞踏である（254f.）。ルート・ハイデブラントには尼僧神秘主義の姿が重なっている。彼女の病気、クヴィントに対する奇妙な求愛行為は、尼僧神秘主義の中核をなす神との婚礼のイデーである。またブレスラウの怪しげな酒場 'Musenhain' はディオニュソス的異教のOrgie でもある。この二重写しの技法が世界全体に向けられた時、ハウプトマンの神秘主義が生ずる。それは世界の背後に神秘力をみる方法である。総じてハウプトマンは、現実の日常世界の背後に不可視、不可知の世界を感じていたらしい。それは自然の奸計となって人を湖の中に呑み込んだり（『謝肉祭』）、欲情の網にからめとり理性を狂わせたり（『踏切番ティール』、『ソアーナの異教徒』）、天の声となって神の僕の道を歩ませたりする（『使徒』、『クヴィント』）。人間はこれら不可知の力に触れた時、現実の真空状態から逃れて、意味の重力をとりもどすのである。しかし時にはプラトン的イデア であったり（『そしてピッパは踊る』）、ヘブライの神であったり、また時にはギリシャのモイライやエロス・ディオニュソスであったりするこの神秘力には理性の解釈は通用しない。この多様な現象形態をもつ神秘力に特徴的なのは、現実世界の人間にとって積極的な力とはならないことである。時には神秘主義の奥義たるunio mystica も起こるが（クヴィンの監獄のなかでのキリスト との合体（131f.）、あるいは『ソアーナの異教徒』におけるフランチェスコ・ヴェーラとアガータの姿となってあらわれたエロスとの合体）、それは現世において人間を狂人にしてしまう。不可知の力の支配をうけた人間は、その祭壇に犠牲を供えねばならないが、その犠牲は何の調停ももたらさない。見返りのない犠牲、ここにハウプトマンの悲劇の理念がある。クヴィント自身もopfersüchtig なのであるが、小説の最後で彼がシャルフ兄弟に与える言葉は印象的である。「おまえ達はキリストにおける愚か者のために、何と多くの愛、忠誠、信仰、希望、行為を無駄に費さねばならなかったことだろうか」（395）では解決は、救済はどこにあるのだろうか。もちろん彼岸に、死のなかにしかありえない。それ故純粋な魂ドミニークが解決策を死に見出した時、クヴィントは全面的に賛同し、祝福するのである。

4

古代ギリシャ世界がハウプトマンの根源回帰本能に大きな影響を及ぼしたことは良く理解できるし、それが生涯を通じてハウプトマン文学の源泉のひとつになっていることも明白である。しかし少年の頃より敬虔なキリスト教の雰囲気のうちに育った彼は、死ぬまでイエス・キリストとその受難の物語の呪縛から抜け出すことができなかった。もっとも彼とキリスト教との関係は、キリスト教のもつ様々な困難、人類の歴史に残したその足跡等を考慮する場合、必然的にambivalentなものにならざるを得ない。彼が早くからイエス・キリストを創作の対象にする計画を抱いていて、〝Jesusstudien〟と名づけられたこの計画が演劇のためのものであり、度重なる試みにもかかわらずこの演劇がついに完成しなかったという事実は、その辺の事情をよく反映している。ハウプトマン自身は『クヴィント』について、これが信念や思想の深化ではなく「救済」(435)であったと語っている。

書くことが救済を意味したイエスの生涯が長い試行錯誤の末に完成したのは、演劇形式においてではなく、長編小説としてであった。それ故1890年に出版されたNovelle『使徒』は、『クヴィント』の前身とみなすことができる。この小説もMessiaswahnにとりつかれた若者のunio mystica体験を扱っているが、『クヴィント』に比べると自然主義技法で描かれた精神病患者のPathologieといった傾向が強い。また『使徒』創作の動機として、ハウプトマンのスイスにおけるアウグスト・フォレルの精神病院での体験も指摘されている(4)。しかしハウプトマンの心をとらえたものは精神病という病気の実態ではなくて、精神病のなかにもみとめられたキリスト教の神秘力の出現なのではなかったか。この小説を自然主義の手法による人間心理の病理学としてのみ解釈することは、あまり妥当とは思われない。人の心は、'ein weites Land'といったシュニッツラーや、分裂病患者レンツの目を通して不気味な世界の裂け目をみたゲオルク・ビュヒナーと比較すると、ハウプトマンの心理描写はあまり尖鋭な印象を与えない。それ故この小説では病理学ではなく、あくまでもunio mysticaの描写が問題なのである。

『クヴィント』に関しても事情は同じといえよう。確かにホルスト・ガイアーがいうようにクヴィントを偏執狂患者としてとらえることも可能であるし(5)、またベックマンが主張するように歴史上の人物を自然主義的決定論の世界へ移して再解釈をおこなうという説も正当である(6)。事実この小説が基本的には自然主義的手法でもって描かれていることは明白である。クヴィントをめぐる事件は完全に現実の世界で合理的に進行していく。ストーリーが神秘のベールにおおわれて、時間空間の規範がくずれることはない。登場人物もその性格や行動に対しては充分な心理的説明がなされている。特にクヴィントに関しては必要以上と思われる程だ。しかしこの自然主義と鋭く対立するのが素材の異常さだ。この小説のストーリーの素材がイエスの生涯であることは誰にでもすぐ気が

つくであろう。クヴィントの出生、父親の職業、最初の説教、バプテスマのヨハネによる洗礼、悪魔の誘惑、弟子、奇蹟、イェルサレム入城そしてイスカリオテのユダによる裏切り。名前からしてすでに暗示的だ。「視よおとめ孕みて子をうまん、その名をイマヌエルととなうべし」(7) Quint を5の暗示と解すれば、この小説は第五番目の福音書evangelium quintum となる。まさに自然主義技法で描かれたイエス伝、第五番目の福音書である。

そもそもリアリズムの対極にある聖書を自然主義技法で再構成するという試みが、大きな困難を予想させる。聖書とは神の啓示であり、その言葉はすべて比喩であって、日常の現実世界とはまったく別の次元に属するものであるからだ。リアリズムの目でもって読まれ、リアリズムの精神で解釈されるとき、聖書はあらゆる力を喪失し地上において無となる。人間の理性、論理で聖書に立ち向かう試みは最終的には破滅する。聖書が人間の論理の彼岸にあることは、すでにパスカルが示したのではなかったか。ハウプトマン自身もそのことを知らないはずはなかった。それにもかかわらず自然主義という武器でイエス・キリストに真正面からとり組んだということは、キリスト教に対するハウプトマンの総決算を意味しているといえよう。それ故『クヴィント』のなかにおいて扱われているのは、イエス・キリストの人間像ではなく、イエス・キリストの姿となって福音書のなかに啓示されたキリスト教の精神ともいうべきものである。現実世界におけるあらゆる矛盾、無力にもかかわらず、イエス・キリストのもつ力は依然強大である。ハウプトマンはこの不可知の力にその造形力でもって何とか形を与え、キリスト教というPhantom を自己の可視圏内に封じ込めようとしたのである。目の前にはギリシャの神々が生まれたばかりの初々しさで、新しい生の充実を約束しているようであった。

5

イエス・キリストの精神が地上にひきずりおろされ、鞭打たれる。クヴィントは不義の子であり私生児だ。その出生故クヴィントは世間から迫害され、孤独のうちに宗教心を培う。無教養の精神に聖書の言葉は狂気の道を開く。Monomanie となってあらわれた「キリストのまねび」。'Kein Narr in der Welt, der nicht Narren machen!' (20) 狂人のもとに弟子が集まる。その弟子達も皆怪しげな素姓の連中だ。かくもいかがわしく、グロテスクなクヴィント教徒達ではあるが、悲惨な現状にあえぐ者達にとっては溺れる者の藁となる(257)。誤解による信仰、錯覚に基づく奇蹟。悪魔の誘惑も妄想にすぎない。クヴィントの言葉は弟子達にすらも理解されず、救いを求める人々に何の助力をも施せない。最大の不幸はクヴィントの Opfer が天の父にうけ入れられなかったことだ。復活を信ずる信徒の如くクヴィントの釈放を待つ善意の人々から逃れるように姿をくらまし、放浪の旅に出る。一夜の宿を求めるクヴィントの目の前では常にドアの閉まる拒絶の音。あげくの果ては凍死。まさに自然主義の精神によるイエス・キリストの奇蹟の破壊である。「宗

教、宗教ですって。もちろん僕は、神が人間のような格好をして、人間のようにふるまい、息子があってどうしたとかこうしたとかいうようなことは信じませんよ」[8]『寂しき人々』のヨハネスは、この立場を表明する。合理的精神によるキリスト教攻撃はひとりクヴィントのみにとどまらず、彼の弟子や谷の信者達にも及ぶが、その際この心理解剖が普遍的性格をもつことがよくあらわれている。クヴィント信者達の姿には歴史的な宗教現象の形態が投影されていることはすでに述べた。さらにこの攻撃は`Musenhain'の常連達において、ニーチェ的な鋭さに高まる。「キリスト教の教えとともにヨーロッパの人間の中へ、生に敵対する要素が到来した。……私は総じてキリスト教を、相変らず我々全人類の現状におけるガン腫瘍とみなしておる」（369）あるいはまたドストエフスキー風の解釈がなされる。「これまで何千年もの間人類によって探し求められてきたにもかかわらず、神は発見されなかったか、あるいは見つけ出されたか、そのどちらかであろう。しかし見つけ出されたのであるならば、その探索は無駄であったといわざるを得ない。何十万年あれこれ考えまわしてもいまだに社会問題を解決することもできない神、あるいは社会問題の解決などには何の興味ももたないような神、そんな神が何の役に立つというのか」（373）しかしこの合理精神と科学信仰が攻撃対象としているのは、主として既成宗教と化したキリスト教の側面にすぎない。福音書そのものはあらゆる合理精神による解体の後でも、なおかつ破壊しえないものを含んでいる。ハウプトマンはこれを根源的な生の現象とみなした。

たてまえとして合理主義精神の立場をとる語り手、Chronist は、クヴィントの心のなかまで自由にのぞけるにもかかわらず、最終的には全知全能の立場を放棄する。「人間の運命の必然的な進路を、そのあらゆる細部にわたって理解することは不可能だ。なぜなら人間は誰でも誕生と死の間の一回限りの現象だからであり、かつ観察者というものはどんな対象にせよ自己の独自の自然的性質の限界のなかでしか把握できないからだ」（300）さらに一貫してクヴィントを狂人扱いにしてきたChronistは、その立場さえ疑問に付す。「（クヴィント）が結局のところ本当の救世主でなかったかどうかどうして知ることができたであろうか。本物の救世主が神によって播かれた種子、王国の種子がどのくらい熟したか見回りにきたのかもしれないではないか」(413)Chronistを基盤として行われた攻撃は、ここにおいてはしなくも座折するのである。また専門医師の鑑定もクヴィントに病気の証明を行うことができない。ハンス・ベライテスはクヴィントに精神異常の徴候をみようとするが、その努力も無駄に終わる。「（ベライテス）は当然のことながらすぐさま前もって行っていた診断の証明となる徴候をさがしたが、エマヌエルのイエスに似た印象は技巧を弄したつくりものに容易には還元できないことがわかった」（217）あらゆる否定的な価値評価にもかかわらず、クヴィントは悪の原理に還元できない。悪はむしろ彼をとりまく社会の方にあった。社会はサタンの支配下にあり、崩壊寸前の様相を呈している。小説のなかに色濃くあらわれた黙示録風の表象は、末世的世界観となって背景を形づくっている。この暗黒の背景のなかでクヴィ

ントは一種独特の神秘的な魅力を発散する。理解されはしないが、善意の人々の目に真理と愛の光とも映る彼は、ペシミスティックな自然主義の世界に投げかけられた救済の光にもたとえられるのである。

クヴィントにおいてChronistの攻撃の手を逃れたものに、自然宗教的側面がある。神秘主義者に多くみられるようにハウプトマンも汎神論的傾向をもっており、それは他の作品にもあらわれている。母親に無宗教を咎められた『寂しき人々』のヨハネスは答える。「(既成の宗教)は信ずる必要はありません。しかし宗教はもっているんですよ。<いくぶん荘重に>自然を認識しようと企てる者は、神を認識しようと努力するのです。神は自然なんです」(9)神即自然というゲーテ的解釈は、明らかにハウプトマンの神秘主義に通ずるものであった。『クヴィント』においても自然とクヴィントとの神秘的交歓の場面が数多く描かれている。もっともハウプトマンにあらわれる自然宗教は、ゲーテあるいはスピノザ等のひとつの理論で解釈はできない。たとえばクヴィントの太陽崇拝はミトラ信仰的な性格をもち、また太陽の運行に誕生、死、復活という神話のアーキタイプを認めるのも、古代オリエントの宗教母体への先祖返りを暗示しているのである。

福音書からイエス・キリストの教義体系を理論的に抽出するのは極めて困難である。同様にクヴィントからまとまった主張をひき出すのも不可能に近い。人々の問いかけに対してもクヴィントは、ほとんど的はずれともいえる聖書の引用で答えるのみである。しかしこれら雑然としたクヴィントの言葉のなかでも、父なる神と人の子に関する言葉が特に目につく。彼は人の子Menschensohnという表現について考えをめぐらせた後、もっぱら自称としてこの言葉を使う。そして人の子であるクヴィントは、父なる神を探し求めるのである。「あわれなエマヌエルは神を探し求める人間であった。……しかし彼は理性で神を探さなかった。彼は愛で神を探し求めたのである」(245)神とは父なる神でありクヴィントは人の子であり、神の子でもある。そして神は精霊である。もちろん三位一体に対する暗示である。クヴィントの三位一体説には、個人の魂における神の誕生という神秘主義の理論が含まれているのであるが、同時にそれは家族問題の反映ともなっている。家族の絆の問題はハウプトマン文学の主要テーマのひとつであり『平和の祭』や『寂しき人々』などではもっと直接的に扱われており、さらには晩年の『アトレウス四部作』もこのテーマ圏に含まれているのである。さてクヴィントにもどるが、彼はこの世においても実際の父親を探す。ブレスラウに行く前に訪れたカトリックの僧侶が実父であるらしいと暗示されるが、両者の会見は何の実りももたらさず、クヴィントはこの世での父親探しを断念する。彼はさらにブレスラウの監獄で母親との絆をも否定する。血の絆に対して霊による絆が対比させられる。現実において喪失した家族の絆を神秘的次元において回復させるという、ハウプトマン独特の解決方法だ。人の子Menschensohnという表現は次のように解釈されよう。神性は常に`Gottmensch'(200)を介して人間にあらわれた。すなわち人の姿という可視的なものによって初めて人間は神に親しみを抱くことができる

のである。「人は目にみえぬ神を畏怖しているかもしれぬが、愛してはいない。これに反して人は人間的な仲介者を愛するのだ。イエスが一身に集めた名状しがたい愛は、不可視のものの冷たい暗闇のなかへも光を放ち、みなれぬ神性をほのかな息吹で暖め、自らが神の光の反射であると打ち明けることで、とこしえの愛の約束を内包するのである」（200）

クヴィントの姿に即して示されるキリスト教の特徴としては、さらに倫理性がある。神秘主義には苦悩を通してキリストのまねびに至るという傾向も含まれており、また前述のようにハウプトマン自身も現状を苦悩としてとらえていた。それ故イエス・キリストの受難には特に関心があったと思われる。クヴィントは自分の生涯を次の句の如く解釈していた。「人の子は異邦人にわたされ、嘲弄せられ、辱しめられ、唾せられん。彼等これを鞭打ち、かつ殺さん」[10]総じてハウプトマンの作品が示すのは苦悩する人類の姿である。自伝である『わが青春の冒険』が苦痛の記述で始まっているのも、苦悩の詩人ハウプトマンにふさわしい。「かくて痛みが私の精神を目覚ませ、苦しみが私を意識へと導いたのである」[11]この世において魂の純粋さを保持しようとする者は、必ず苦悩の十字架を背負わねばならない。この意味で苦悩は人類の倫理性の保証ともなる。『クヴィント』ではドーミニクがこの教えを実践する。「僕はこの世の子等（Kinder der Welt）のもとで安逸に暮らすために魂の純粋な財産を手離したくはない。それを手離すくらいならむしろ他のものすべてを手離すつもりだ」（390）この倫理性が極論にまで達しているのは、Selbstlosigkeit の教えにおいてである。苦悩に対する唯一の対応策はSelbstlosigkeit であり、これは最終的にSelbstmord と同意語になるのである。クヴィントはいう、「我欲（Selbstsucht）を殺せ、そしてもし他に仕用がない場合は……汝自身を殺せ。我汝に告げる、己れの命を愛する者はこれを失い、己れの命を愛さぬ者はかえってこれを得べし」（371）。この教えに従って自殺するドーミニクは、Idealform des Lebens[12]を求めて懊悩する『ブーヘンホルストでの婚礼』のキューネレと同じ血筋の人間である。しかしここには倫理性の厳格さと同時にこの世での無力が示される。この世で純粋な魂を実践に移そうとする人間は、狂人、愚者ein Narr とみなされてしまうのである。この世は純粋な魂の安住の地ではなかった。ドーミニクが確信をもって聖者と呼んだクヴィントは、彼自身と同様に、「いわば間違ってこの世にあらわれたのにすぎない」（347）のである。ハウプトマンのペシミズムは将来にまで及ぶ。クヴィントは腹違いの弟グスタフに神の王国の継承者を見出して特別な愛情を注ぐ。しかしクヴィントに心から帰依しており、将来彼と同じ道を歩むはずであったグスタフは、十四才に満たずして夭逝する。「此の小さき者の一人亡ぶるは、天にいます汝らの父の御意にあらず」[13]しかし天の意志は実現しなかったのである。

6

ハウプトマンの「対決」は、宗教理論の上でのみ行われたのではなかった。例えばドストエフス

キーと比べてみると、その複雑に入り組んだ神学的弁証法に対して『クヴィント』の理論はあまりにもnaivである。そもそもハウプトマンは理論家ではなかった。彼の作品は思弁性とは程遠いものである。トーマス・マンは芸術家を造形と批評の二つのタイプに分類したが、この分類法に従うならハウプトマンは明らかに前者に属する。造形家ハウプトマンの腕には定評があるが、『クヴィント』においては彼の天与の造形力が、造形力の射程拒離を越えた対象と対決する。舞台が現代のシュレージェンという彼の得意の場所に設定されたのも、この対決に備えてであったと思われる。かくて自然主義と神秘主義、形式と没形式の戦いが始まる。その結果生じた作品は、伝統形式に極めて忠実な、naivな物語であった。この執拗とも思える伝統形式は、同時代の作家と比較するとむしろ異常とも思える程だ。自ら伝統継承者をもって任ずるトーマス・マンの伝統形式にしても、それは限界ぎりぎりの所でかろうじて保たれた伝統形式であった。もはや破壊されてしまった世界の関連を、極度に知的な操作で関連し直した文学、それがトーマス・マンの文学だ。

ハウプトマンに独特のnaivな文学世界は、彼の世界観、あるいは前述の世界に対するパースペクティブに起因していると思われる。ハウプトマンにあって特徴的な物の見方は、物を「物自体」としてみないことである。物は主観の直観形式の彼岸にある不可知のなにかではなく、人間の五感がとらえる印象そのものとして存在し、現実の実在性の重みをずっしりと担っている。しかしもう一方で物はその背後において、人間の論理形式、言語を超越した深みのなかで何か神秘的な関連のうちに位置を占めている。人間がこの神秘的な関連を知覚するには、ただ物の直接的印象に頼るしかない。また人間の主観も世界のパースペクティブの中心にある唯一の裁判所ではなく、その背後において神秘的な世界の関連のなかに位置を占めるものなのである。従って主観が現実を圧して膨張することも許されない。ハウプトマンとドイツ・ロマン派との関連をみつけることは容易である。『クヴィント』においてはドーミニクが、自らドイツ・ロマン派の子として非合理世界を擁護している。「もしあなたが合理的な答を求めているなら、僕はそれにはふさわしくない男だ」、「僕は魔法のない人生なんて、浅薄な思想家が考え出した産物にすぎないと信じている」、「僕達のひ弱な意識が照らし出すこの狭溢な領域の外に、永遠、無限の領域がないのだろうか」（361）しかしドーミニクの「存在の神秘」（347）を求めるまなざしは、現実世界の提示する直接性を排除するものではない。両者は共存するのである。この共存関係においてハウプトマンは特に現実の直接性に固執し、そこから彼独自のNaivitätが生ずる。 総じて彼のパースペクティブのなかでは現実の直接性の牽引力が強大であるために、物がその独自の存在を完全に離れて別の次元へ移行することが困難になる。従って純粋な象徴のレベル、観念的連関の新次元が成立しにくい。繰り返しになるが、夢は夢にとどまるのである。

『クヴィント』においては福音書との明確な対応がみられる。しかしこの対応は露骨すぎる二重写しになっていて、両者の距離が破壊され、真の象徴関係が形成できなくなっている。語り手のこ

とさらな対応関係の指摘は、この破壊をさらに強める。またこれに背景描写が加わる。ハウプトマンの作品においては時として背景が独自の存在を主張し、ストーリーから浮き上がることがある。小説中に数多く描かれるクヴィントと自然の交歓の場面は、ストーリーの進行にあまり関与しない。ここでは何の変哲もない動植物が特別な意味も与えられずに描かれているが、小説全体のなかではむしろ他の部分よりもアクセントがおかれているような印象をうける。この自然描写を、例えばシュティフターの『晩夏』のそれと比較すると、その特徴がより明瞭になってくるだろう。『晩夏』には様々な自然が描かれているが、それはすべて自然そのものとして描かれているのではなく、あくまで作者の意図に従った観念を表現する道具としてあらわれているのである。そもそも『晩夏』には現実の自然などないのではないか。シュティフターは物も植物もはては害虫にいたるまで、厳格な構成原理に従って小説構造の理念的構成要素として形成してしまったのだ。これに反して『クヴィント』における自然描写は、小説全体のなかでの理念的構成要素というよりはむしろ、独自の実在感でもって他の部分に対しその存在価値を主張している。それはあらゆる思弁性を越えた現実の直接性と、その直接性を通じて暗示される深奥の関連世界を示す箇所となっているのだ。それ故それは観念を体現しもしないし、直接性を離れて純粋な象徴へ移行するということもないのである。ハウプトマンの作品では形象が理念の純粋な道具とはならない。

形式と没形式、自然主義と神秘主義という基本的な対立の他に『クヴィント』には、様々な思想の断片が散在し、互いに抗争し合っている。しかしこれらの思想は決して徹底的に討論され追求されるということはない。小説のなかにおける純粋な思想の展開は物語の直線的進行を妨げ、その連続をたち切る。この傾向を押し進めていくと、ヘルマン・ブロッホやロベルト・ムージル等にみられるエッセイズムの浸透した小説タイプができあがる。トーマス・マンの小説なども多分にこの傾向の支配下にある。しかしハウプトマンの造形意志はこのエッセイ傾向とは完全にたもとをわかつ。ハウプトマンにあってはいかなる思想も物語が提示する仮構の連続を中断してはならなかった。いわゆる伝統的な物語の虚構空間、舞台装置が絶対的な規範として君臨する。拮抗し合う様々な構成要素や言語の表現能力の彼岸にある神秘までが、伝統的直観形式に基づいた、リアリスティックな物語形式の額縁にはめ込まれる。そのいずれをとってみてもおよそnaivとはいえない諸々の構成要素が、ハウプトマンの造形力により現実の直接性に基づいた有機的連関のなかに組み込まれ、独特のnaivな物語が誕生するのである。この造形過程は決して知的操作を感じさせない。ハウプトマンの物語形式は過去に既に存在したものと同一のものなのだ。それ故ハウプトマンにあってはパロディーの概念は通用しない。なぜならパロディーとは、既存の文学形式に対する極度に知的な操作によって生じた一種の遊技空間であるからだ。ここでは人工的な抽象空間が、屈折した形で原典との相似関係を示す。そもそもnaivなパロディーなどは存在しえないのである。『クヴィント』は聖書のパロディーとみなされる要素を多分に含んでいるが、それはハウプトマンにとってスト一

リーや人物等を提供するたんなる素材にすぎなかった。聖書の形式はこの小説にとってそれ以上の意味をもってはいない。ハウプトマンはこの小説が示す年代記風物語形式にも何ら新しい加工を加えていない。内容や内部の構成原理には彼独自のものがあるのは当然である。しかしそれをおさめる額縁の方は、過去の形式の直接的な踏襲なのである。この意味においてハウプトマンは、naivであり伝統的なのだ。

7

『クヴィント』は明らかにハウプトマンの世界観上の危機を前提としていた。それ故の「救済」なのである。この小説はキリスト教、社会主義、科学の功罪等の思想問題を含んでいる。しかし根本的に解決された問題は皆無といえよう。例えば宗教的熱狂も社会変革に対する情熱も、一時的な神経症的昂奮状態の産物、「色鮮かな麻薬の煙にも似たユートピア」（363）として片付けられているだけである。

「人々は途方もない全般的な社会の倒壊を本気で信じていた。それは遅くとも1900年頃には始まって、世界を更新するはずであった。ちょうどこの愚か者（クヴィント）のあとを追う貧しい田舎の職人達が千年王国と新しいシオンを期待していたのと寸分たがわず、社会主義の陣営とその思想に近い若いインテリ達は、社会主義に基づく福祉国家、すなわち理想的な未来国家を期待していたのである。……それぞれのもとであれこれと名づけられたものは、結局のところ同じ魂の力と、救済や純粋、解放や幸福、つまりは完璧さを求めるあこがれから生じたものなのだ。同じものをある者は福祉国家といったり自由といったりし、また別の者は極楽とか千年王国とか天国といっているのである」（363）

また完全な解決は死のなかにしかないこともすでに述べた通りである。従って救済とは個々の思想問題の解決を意味してはいないのだ。それはハウプトマンが芸術家として形成する世界像に関係している。様々な問題を包含しつつもあらゆる対立を越えた統一的世界像、いや宇宙像を構築すること、これが『クヴィント』の根本課題なのである。ハウプトマンは基本的に現実世界の断片を扱ったり、あるいは個々の思想問題を徹底的に追求するタイプの人間ではなかった。そのパースペクティブは宏大である。『クヴィント』においてはキリスト教と近代科学精神が、古代ギリシャやオリエントの神話世界のヴィジョンと共存し、対応し合ってひとつの有機的な関連世界を形成している。構成原理は自然主義と神秘主義の精神の共働である。神秘主義的世界解釈という点においてノヴァーリスを想起させるこの宇宙論は、小説中ではこれまたドーミニクが親しんでいたものである。

「（ドーミニク）は自然科学の知識を豊富にそなえていた。彼は宇宙及び宇宙生成の夢を愛していたのである」（346, 下線は筆者）

8

ハウプトマンのような多作にしてかつ多様な傾向を示す作家から統一像を抽出することは、至難の業といわねばなるまい。彼はやはり何といってもDramatikerであり、そのDramaturgieを抜きにしては全体像を語れないこともいうまでもない。しかし『クヴィント』にはハウプトマン文学の基本姿勢がもっとも明瞭にあらわれていると思われるのである。本文中にトーマス・マンとの比較がかなりでてくるが、先にも述べたようにほぼ同時代に生きた二人にはかなり共通点が見出される。わけても重要と思われるのは、両者の文学が描き出す全体的世界像である。二人とも現代の価値真空に抗して伝統のなかから有機的な世界の連関を見つけ出し、全体的な世界のヴィジョンを構築したのである。そして両者の相違点は、自ら市民時代最後の子としての意識をもつトーマス・マンが、世界観の思想的基盤にゲーテあるいはルネサンス以来のHumanismusをもつのに対し、ハウプトマンの方は視野がそれよりもさらに宏大な点にある。すなわちハウプトマンの世界は、現代プロレタリアートから古代オリエントの神話世界までを包括しているのである。シュレージェンの織工の惨状に貧困の古典的な姿を見たというのも、まことにハウプトマンの世界観をよく示している。そしてその世界観の思想的基盤となっているのは、何度も言及した神秘主義である。『クヴィント』において色濃く反映されている神秘主義はその後さらに深みを増してくるのであるが、この点に関しては今回は触れない。ただひとつ最後に指摘したいのは、ハウプトマンとその神秘主義の射程距離についてである。神秘主義はあらゆる国境を越えて、文明の誕生以来「正統」の影に隠れながらも連綿と続いており、現在においても何ら新鮮さを失っていないように見うけられる。(14) それ故ハウプトマンの神秘主義も時代を超越した力をもつのではないだろうか。クヴィントは我々に「神の王国の秘密」という謎を残してこの世を去ったが、この謎こそ人類が永遠に求め続ける窮極の真理と思われるのである。

使用テキスト

Gerhart Hauptmann : Der Narr in Christo. Emanuel Quint. Das erzählerische Werk, Taschenbuchausgabe in 10 Einzelbd., Band 2, hrsg. von Ulrich Lauterbach, Ullstein Verlag, Frankfurt/M-Berlin, 1981.

なお（ ）内の数字は同テキストのページ数を示す。

注

(1) G・ルカーチはハウプトマンの才能を認めた上で、その文学が没落しつつあるブルジョア階級のイデオロギーの枠内にとどまっていたため、社会の現実の正しい姿を把握できなかったと批判している。

Vgl. Georg Lukács : Gerhart Hauptmann. In : Georg Lukács Werke, Band 4, Luchterhand Verlag, Neuwid und Berlin, 1971.

(2) Georg Lukács : ibid. S.69.

(3) Vgl. Paul Böckmann : Der Naturalismus Gerhart Hauptmanns. In : Interpretationen Band Ⅱ, Deutsche Dramen von Gryphius bis Brecht, hrsg. von Jost Schillemeit, Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main, 1971.

(4) Gerhart Hauptmann : Das erzählerische Werk, Band 1, S.450

(5) ホルスト・ガイヤー『狂気の文学』（泰井俊三訳、創元社）第十二章　宗教妄想 ── ハウプトマンのエマヌエル・キント

(6) Paul Böckmann : ibid. S.293

(7) 『イザヤ書』第7章14節，『マタイ伝』第1章23節

(8) Gerhart Hauptmann : Das dramatische Werk in 8 Bänden, Band 1, hrsg. von Hans-Egon Hass, Ullstein Verlag, Frankfurt/M-Berlin-Wien, 1977, S.313

(9) ibid.

(10) 『ルカ伝』第18章32～33節

(11) Gerhart Hauptmann : Das erzählerische Werk, Band 6, S.125

(12) Gerhart Hauptmann : ibid. Band 1, S.214

(13) 『マタイ伝』第18章14節

(14) 神秘主義に関しては、主として以下を参照した。

- ヴェンツラッフ＝エッゲベルト『ドイツ神秘主義』（横山滋訳）、国文社
- 『世界神秘学事典』（荒俣宏編集）、平河出版社
- 高橋巌『神秘学講義』角川選書110
- 服部正明『古代インドの神秘思想』講談社現代新書529
- 上田閑照『マイスター・エックハルト』（人類の知的遺産21）、講談社
- Josef Quint : Meister Eckhart, Carl Hanser Verlag, München, 1963

○ Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte, zweiter Band, hrsg. von Werner Kohlschmidt und Wolfgang Mohr, Walter de Gruyter, Berlin, 1965

※ なお『クヴィント』においては福音書の神学的あるいは聖書学的な探究はほとんど問題とされてはいないが、福音書をめぐる事実関係、とりわけキリスト教と古代オリエント神話との関係や、イエス像や「人の子」等の用語についての現代的解釈としては、主として以下を参照した。

○山形孝夫『聖書の起源』講談社現代新書448
○荒井献『イエスとその時代』岩波新書909
○H・ブラウン，H・コンツェルマン他著『イエスの時代』（佐藤研訳）教文館

（文学部助手）